慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第一次世界大戦中におけるドイツ社会民主党とプロレタリア国際主義： ドイツ社会運動史にかんする最近の資料（四ノ二）
Sub Title	The German social democratic party and proletarian internationalism during the First World War : documents and materials of the history of German working class movement (2/4)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.10 (1961. 10) ,p.884(42)- 898(56)
JaLC DOI	10.14991/001.19611001-0042
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611001-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

第一次世界大戦中における ドイツ社会民主党とプロレタリア国際主義

——ドイツ社会運動史にかんする最近の資料（四ノ二）——

飯田 鼎

一

本稿は、「第一次世界大戦の勃発とドイツ社会民主党——ドイツ社会運動史にかんする最近の資料（四ノ一）」と題して、筆者が、本誌第五四巻第一号に発表したものの続篇である。すでにのべておいたが、本論文の素材ともいうべきマルクスレーニン主義研究所編纂にかかる「ドイツ労働運動史にかんする文書および資料（Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung）」の第二部一巻は、七〇〇頁を越える大冊であり、第二インターナショナル崩壊の端緒となった第一次世界大戦とドイツ社会民主党の崩壊の過程を裏付ける生々しいドキュメントをもって充たされている。そこでひきつづき、やや詳しい紹介を行うものであるが、本資料集のうち、今迄第二部および第三部が先に発行されてきたところ、最近の広告によれば、第一部第五巻が完成されたことは、[1] とくに十九世紀から今世紀初頭にかけてのドイツ労働運動・社会主義運動の研究に志す者にとって、まことに喜ばしい。

さてここに紹介しようと試みる資料の重要性は、主として以下のような点にある。すなわち、㈠第一次世界大戦勃発以後における国際社会主義運動とローザ・ルクセンブルクおよびカール・リープクネヒトにひきいられるドイツ社会民主党左派との関係、㈡戦争の進展にともなう労働者階級の窮乏化、これに抗議する大衆運動、㈢社会民主党中央派の社会排外主義との妥協、とくに一九一五年から一九一六年にかけて、帝国主義戦争を遂行するドイツ政府に抵抗する大衆のかなり広汎な運動が、プロレタリア国際主義の思想的背景のもとに展開されたという事実が、本資料を読むことを通じてもっとも生き生きと感じられる点である。

（1） Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Reihe I., 1836～1914, Bd. 5; 1905～1914, SS. 960 (Dietz Verlag).

二

資本主義がいわゆる全般的な危機の段階に入ると、当然その段階的認識としての帝国主義にたいする関心、その本質をめぐる問題が論争という形で提起されざるをえないのは、構造改革論と現代資本主義との関係にかんして活潑な論議が展開されている今日においても、依然として真実である。

ドイツ社会民主党の十九世紀末期以来の分裂も、実はこの帝国主義の評価をめぐって決定的となったのだといっても過言ではあるまい。レーニンが、先駆的業績として高く評価したその「帝国主義論」のなかで、ホブソンは、一八七〇年以後のイギリスによる植民地獲得の努力を新帝国主義と規定し、それを支える「帝国主義の経済的寄生者」にたいし「新帝国主義は、国民にとっては悪い商売であっても、国民の中の或る階級及び或る産業にとっては良い商売であった。莫大な軍備費、高価な戦争、対外政策の由々しい危険と困難、イギリス国内における政治的・社会的改革の阻止は、国民にたいしては多大の損害をはらんだが、或る種の産業および職業の当面の事業上の利益にはかなり貢献した」とのべて非難している。[1] 彼が本書を通じて一貫して主張しているところは、帝国主義にたいする経済的側面からの把握であり、その強力な推進者として何よりも金融業者をあげ、「金融業者は、帝国主義を発動させるに必要な能力であるところの集中力と、はっきりした計算とをもっている」[2] と指摘していることである。急進的な自由主義者としてホブソンは、マルクス主義による分析をとらなかったけれども、帝国主義の本質をもっとも実証的に明確に把握しその反人民的性格を暴露していた点で、今日もなお読まれるに値する。「帝国主義の経済的根元は、強力な組織された産業界及び金融界の関係者たちが、彼らの過剰商品及び過剰資本に対する私的な市場を、公の経費並に公の武力によって獲得し開発しようとする欲望である。戦争・軍国主義及び『元気のいい対外政策』はこの目的にとって必要手段である」[3] という彼の分析には、帝国主義を産業資本のみならず、独占金融資本の政策として把握している点で科学的であった。レーニンは、この点を評価し、「ホブソンは、近代帝国主義の二つの『歴史的＝具体的』特殊性、すなわち㈠いくつかの帝国主義の競争、㈡商人にたいする金融業者の優越を、よりただしく考慮にいれている」[4] とのべている。

このようなホブソンの理論の客観性・科学性にたいして、S・P・D・中央派の指導者カウツキーの帝国主義にたいする考え方は、帝国主義をもって、「そこにどんな民族が住んでいるかにかかわりなく、ますます大きな農業地域を隷属させ、併合しようとするあらゆる産業資本主義的熱望である」[5] という有名な規定に象徴的にみられるように、㈠産業資本の果す役割を重視し、金融資本が、産業資本にたいする銀行資本の支配、その両者の密接な結合の結果で

あることにたいする認識の欠如、そしていまひとつは、㈡帝国主義の餌食となるものは、農業地域だけであり、ヨーロッパ大陸のように、文明が高度に発展している資本主義国はその対象にならないという誤謬を導き出すことになったという事実、以上の点で、決定的な理論的弱点を免れ得なかった。農業地域ではなくて、高度に発展した工業国同士の戦争、たとえばドイツとフランスとの戦争は、帝国主義戦争ではなく防衛戦争であるという謬想の根拠もそこから生まれる。ドイツ帝国主義の政策を支持し、プロレタリア国際主義を裏切り、「反動の本源」ツァーリズム・ロシアの打倒の名のもとに政府の政策を支持し、軍事予算に賛成したドイツ社会民主党の政策の背景には、たえずこのカウツキーの帝国主義論が有力な理論として意識されていたことは、以下の資料を読むに際し、とくに銘記すべきことである。

（1）　ホブソン「帝国主義論」上巻、九六―九七頁、矢内原忠雄訳（岩波文庫）昭和三四年八月。
（2）　前掲書一一一頁。
（3）　前掲書一六六頁。
（4）　レーニン「帝国主義論」宇高基輔訳、一五〇頁（岩波文庫）、昭和三五年。
（5）　カウツキー「帝国主義論」波多野真訳、七頁（創元文庫）、昭和二八年十一月。

三

第一次世界大戦の勃発後、ドイツ帝国主義は、いわゆる〝短期決戦〟をめざして連合軍を撃破しようとしたが、その期待は裏切られ、一年後の一九一五年にはすでに長期戦の様相が濃厚となった。またそれとともに戦争の被害は増大し、それがもたらす悲惨な結果は、ひとたびは排外主義の熱狂のなかにまきこまれた大衆をして目ざめさせる結果となった。そして具体的には、第二インターの崩壊後、各国の革命的な勢力をして第三インターの結成にみちびくことになるのであるが、このような状勢を反映して、一九一五年三月二六日から三月二八日まで、スイスのベルンにおいて国際社会主義婦人会議（Internationale Sozialistische Frauen-Konferenz）が、参戦五ヵ国を含むヨーロッパ八ヵ国を代表する婦人が参加して行われ、クララ・ツェトキン（Clara Zetkin）が議長となったことは注目されなければならない。

この会議が、この戦争を帝国主義戦争として非難しながら、第二インターを崩壊にみちびいたS・P・D・（ドイツ社会民主党の略称）中央派および右派の責任を追究しようとするロシア代表の非難決議を採択することができなかったという事実は、よくその限界と本質とを物語っている。クララ・ツェトキンの、この会議の模様についての報告書から、この問題にかんする部分[1]を抜きとってみよう。

「中央委員会に関係のある婦人団体を代表するロシア代表団は、独自の草案を提出した。それは、積極的に基本的な態度に満足しないで、戦争を遂行する各国の社会主義政党の態度に関するものであり、軍需予算の承認にたいし、有罪を宣告したものであった。婦人の平和的な行動にかんする限り、それは何よりも革命的な闘争の鎖の一環でなければならないし、革命的な方法をもって導かれなければならぬということを主張した。中央委員会に加入しているロシアの団体の代表団やポーランドの代表団を除けば、あらゆる代表者たちや国際的な書記たちは、この草案に反対した。」

とはいうもののこの会議が、軍国主義的熱狂の未だ醒めやらぬ一九一五年三月におこなわれ、理論的な面ではたしかに欠けるものがあったとはいえ、働く大衆の妻として母として、あるいはまた娘として、ここに集まった婦人たちが、戦争への憎しみ、愛する兄弟や夫そして息子たちの命を無残にも奪ってゆく帝国主義戦争にたいする憤りをこめて叫び訴えたとき、[2]その意義は充分に評価される必要がある。その大会決議にはつぎのように書かれている。

「わたしたちの夫はどこにいるのか、そしてまたわれわれの息子たちは？　彼らはすでに八ヵ月も戦場に立たされている。彼らはその仕事をはなれ、その故郷から無理につれさられた。その両親の支えであり希望である若者たち、血気盛りの人々、すでに髪が灰色になった人たち、一家の生活を担う人々……。

幾百万の人々が、共同墓地に葬られている。幾百千の人々が野戦病院に横たわっている――切り刻まれた身体、うち砕かれた四肢、盲目にされた眼、うち割られた脳、しかも疫病に悩まされ、衰弱にさいなまれながら――。

焼かれた村や町、破壊しつくされた橋、灼きつくされた森林や荒らされた耕地、これこそ彼らの行動の跡なのだ。

プロレタリア階級の婦人たちよ！　あなた方の夫や息子たちは、か弱い婦人、あなた方の子供たち、あなた方の家庭をまもるために戦争にゆくのだといわれました。しかし現実はどうでしょうか。『か弱い女性』の肩の上には、二重の負担がかかっております……。あなた方の子供たちは飢え、寒さにふるえ……、あなた方の家庭は冷たくそして空っぽです。」

そしてさらにつぎのように戦争の目的がいかに空虚なものであるかを指摘している。

「あなた方にかくもおそろしい苦痛をもたらすこの戦争の目的は一体何でしょうか？　人々はそれはすなわち祖国の防衛であるというのだが、それでは一体、その祖国の防衛とは何でしょうか。それは幾百万の人々の幸福を意味するはずではなかったでしょうか、幾百万の人々の幸福、その多くの人々を戦争が屍体、不具者、失業者、乞食、寡婦および孤児にしたのではなかったでしょうか。誰が祖国の繁栄を損うのでしょうか。国境の彼方で、他の制服をきて、あなた方の夫たちと同じく、戦争を快いものでないことをよく知っている人々でしょうか、何故に彼らは、他の軍服

を着たその同胞を殺さなければならないのでしょうか？　いやそうではありません。われわれの祖国は、広汎な大衆の窮乏から富を汲みとり、その圧制の上に支配をうちたてようとするすべての人々によって危くさせられているのです。

戦争は誰の利益に役立つのでしょうか。すべての国民の少数の人々だけが儲けるにすぎません。すなわち小銃や大砲、装甲車や潜水艦などを製造する軍需資本家たち、造船所の所有者、軍需品を納める御用商人などです……。

戦争の目的は、祖国の擁護ではなく、彼らの利潤の増大です。資本家的な秩序がそれを欲するのですし、人間による人間の搾取および抑圧なくして資本家的秩序は存立することができません。

労働者は、この戦争によって得るものは何物もないばかりか、却って彼らにとっていとほしいもの、貴ぶべきものを失わなければなりません。

労働者の奥さん、そして働く婦人の皆さん！　戦争をやっている国々の人々は、沈黙させられてつれてゆかれたのです。戦争は彼らの意識をくもらせ、彼らの意志を不具にし、彼らの身体を醜くしました……。

人殺しはもうたくさんです！　この叫びは、あらゆる国の言葉となって響いていますし、幾百万のプロレタリアの婦人がこの叫びを発しているのです。それは、人民の息子たちの良心が人殺しにたいして心から憤っているところの塹壕のなかにさえこだましております。

勤労大衆の婦人たちよ！　この困難な時期に、ドイツ、英国、フランスそしてロシアから社会主義者の婦人が集まりました。あなた方の困苦、あなた方の苦悩は、彼女らの心を動かしました。あなた方の愛する人々の未来のために、平和工作を叫ぼうではありませんか……。

あらゆる国の働らく人々は、兄弟です。これらの人々の一致した意志のみが、人殺しをやめさせることができます。社会主義だけが、未来の人間の平和そのものです。金持ちと富と権力のために、人間を犠牲にするところの資本主義を打倒せよ！

戦争を打倒せよ！　社会主義へ進め！」

この決議のなかには、やはり女性らしい情緒的な反戦・反帝国主義への熱烈な叫びをきくことができるのだが、さきに指摘したように、帝国主義戦争の原因を、ひたすら資本主義体制の矛盾のなかに求めたことは正しいのだが、この戦争の危険を眼前に控えながら、その防止のために徹底的に努力することなく、戦争勃発後は、むしろ戦争政策に追随したS・P・D・中央派および右派の社会排外主義の本質を見抜くことができなかったところに、その理論的な欠陥がみられたのである。

その意味では、一九一五年四月五日から七日にかけて、同じくベルンに開かれた国際社会主義青年会議（Internationale Sozialistische Jugendkonferenz）の方が、はるかに積極的な役割を果し

重要な成果をもたらしたのである。しかしこの会議でも、さきの国際社会主義婦人会議のときと同様に、戦争参加諸国の社会民主主義政党のとった態度にたいする非難決議が提出されたが、十四票と四票で否決されたことが注目をひく。結局この会議は、「現在の戦争があらゆる国の支配階級の帝国主義政策の結果である」ことに意見の一致をみたのであって、[3] つぎのような重要な決議を行った。

㈠スイスにおける国際青年書記局（Internationalen Jugendsekretariat）の設置。㈡雑誌「ユーゲント・インテルナツィオナーレ」の発行、㈢一年一度、各国において国際青年反戦大会を開くこと、そして反戦運動の資金をあつめるために、カール・リープクネヒト基金をつくること。

こうした決議をみるに、さきの国際社会主義婦人会議よりもはるかに具体的な運動を展開しようとする意図は認められるのであるが、しかしやはりS・P・D・内部の日和見主義、つまり中央派および右派の果す役割を充分に正しく評価できなかったことは事実である。

そうした理論的な欠陥にもかかわらず、この二つの青年および婦人会議は、これらにつづくものとしてのツィンメルワルドにおける国際社会主義者会議のための予備的な動きとして、国際的な平和勢力の統一のために貢献するところきわめて大であった。

一九一五年九月五日から八日まで、スイスのツィンメルワルドにおいて社会主義者の国際的な会議が開かれ、S・P・D・の各派はその代表者をおくった。㈠中央派＝ホフマンとレーデブール（Adolf Hoffman und Georg Ledebour）、㈡インターナショナル・グループ＝エルンスト・マイアーとベルタ・タールハイマー（Ernst Meyer und Berta Thalheimer）、㈢ドイツ国際社会主義派＝ユーリアン・ボルヒアルト（Julian Borchardt）。国際社会主義者会議の討議についての公式の報告書[4]をみると、この会議は、一九一四年九月、イタリアのルガノにおいて開かれたイタリア・スイス会議に端を発したといわれ、やがて一九一五年五月十五日ボロニアにおいて国際的な会議の計画が熟したといわれる。この会議において、問題の核心ともいうべきものは、第一次世界大戦の性格の規定とさらにこれとどのようにして闘うか、つまりいかにして早く戦争を終結に導くかということであった。この大会宣言[5]は、その最後につぎのようにのべている。

「このような耐え難い状態のなかで、われわれ社会主義政党、労働組合およびその少数派、われわれドイツ人、フランス人、イタリア人、ロシア人、ポーランド人、ラテン人、ルーマニア人、ブルガリア人、スウェーデン人、ノルウェー人、オランダ人、スイス人、搾取階級との国民的な連帯の地盤に立つのではなく、プロレタリアートの国際的な連帯と階級闘争の上に立つわれわれは、破壊された国際的関係の糸を新しく結びつけ、労働者階級をして自覚せしめ、平和のための闘争に起ち上らせるために集まったのだ。

この闘いは、自由を獲得するための、万人皆同胞のための、社会主義のための闘争である……。

戦争に従っている国々の社会主義者の課題および義務は、この闘いを、あらゆる勇気をもってつづけ、中立諸国の社会主義者の使命および義務、血腥い野蛮にたいするこの闘いに従事している兄弟たちを援けることである……。

労働者諸君！　母親も父親も、寡婦も孤児も、傷ついた者も不具者も、戦争によって被害をうけたあなた方すべての者に、われわれは訴える、国境、砲煙立ちこめる戦場、破壊された街や村をこえて、万国のプロレタリアよ、団結せよ！」

この声明を読むと、現在の戦争が、帝国主義戦争であることを明らかにし、戦争の破滅をみちびいた支配階級の行動を非難するけれども、革命的な方法でそれを終結させるためにどのような手段が必要であるか、こうした具体的な提案を欠いていたという点で、いちじるしく観念的な色彩をおびていた。レーデブールを先頭とするS・P・D・中央派はもちろん、その他の社会民主主義政党の代表団が、反帝国主義・反戦運動を街頭にもたらし、ストライキとデモンストレーションによって国民の激昂を発散させ、資本主義を打倒することを訴えたロシア社会民主労働党（ボルシェヒィキ）やその他の諸国の起草にかかる決議草案を否決したのは、この会議の政策をよく物語っていると同時に、いわゆるツィンメルワルド左派の理論的批判が生まれたのは自然であった。つぎにかかげるのは、ロシア社会民主労働党、ポーランド反対派、ラテン諸国の社会民主党をはじめ、スウェーデン、ノルウェー、ドイツおよびスイスの代表団のうち、上述の決議に不満な少数派（ツィンメルワルド左派）による「ヨーロッパのプロレタリアに訴える」と題するよびかけの一節[6]である。

「われわれがまず第一に要求しなければならないことは、資本主義や軍国主義そして人民の搾取にたいする闘争のために議会におくりこまれた社会主義者の議員が、その義務を履行すること、このことである。ロシア、セルビアおよびイタリアの同志と同志リープクネヒトおよびリューレを除けば、彼らはすべてこの義務を蹂躙し、その強盗戦争においてブルジョアジーを援けるかもしくは動揺しあるいはその責任を回避したのだ。従ってあなた方は、つぎのことを要求しなければならない。すなわち、彼らがその委任を辞するか、もしくは現在の戦争の性格について人民の前に明らかにし、議会外においては、新たにその闘争をはじめるように労働者階級を助けることに議会の演壇を利用することである。あなた方の第一の要求は、あらゆる軍需予算の拒否、フランス、ベルギーおよび英国の各国の内閣からの社会主義者の脱退でなければならない。

だがそれだけでは充分とはいえない……。あなた方のすべての組織、あらゆる新聞は、戦争の重圧のもとに呻く広汎な大衆に、戦争にたいするはげしい怒りを呼びさまさなければならない。あなた方は街頭に出てゆき、支配階級に向って正面から、虐殺は御免だ！　という叫びを投げつけなければならぬ……。」（傍点筆者）

ここにはさきの多数派の声明の抽象的・観念的なのとは対照的に、具体的な運動の方針がはっきりと示され、しかもS・P・D・中央派にみられたショーヴィニズムにたいし、はげしい非難の言葉が浴せかけられているのに気づくのである。こうしたボルシェヴィキを先頭とするツィンメルワルド左派の決議に賛成しなかった人々のなかに、S・P・D・では、いわゆる国際派グループの代表エルンスト・マイアーとベルタ・タールハイマーがいたが、ボルヒアルトはこれを支持した。ドイツ代表団の内部におけるこのような態度の相異は、いうまでもなくS・P・D・の複雑な党内事情を反映するものではあったが、とくに当時牢獄に囚えられていたカール・リープクネヒトのこの会議によせた手紙において明らかにした内容とマイアーおよびタールハイマーの態度とは全く対立するものであったのである。すでにリープクネヒトは、つぎのように「主要な敵は自国内にいる」と牢獄から訴えている。[7]

「すべての国民の主要な敵は、自国内にいる！　ドイツ国民の主要な敵はドイツのなかにいるドイツ帝国主義、ドイツ戦争党（die deutsche Kriegspartei）、ドイツの秘密警察などである。ドイツ国民にとって重要なことは、自国内部の敵と闘うことであり、自国の帝国主義にたいする闘いを行なっている他国のプロレタリアートと共同して、政治的闘争において闘うことなのだ……。」

第一次世界大戦中におけるドイツ社会民主党とプロレタリア国際主義

以上のように、ツィンメルワルドの国際社会主義会議は、帝国主義戦争の勃発を阻止しえなかったばかりか、むしろこれに協調的な態度をとったS・P・D・中央派および右派にたいする非難決議という態度をとることができず、このような多数派にたいして、わずかにボルシェヴィキを中心とする少数派が、その立場を声明したにとどまった。

ところでレーニンはこのツィンメルワルドの会議の意義をどのように評価したであろうか。彼はまず、この会議を、「一歩前進」（„Schritt nach vorn"）であるとし、一九一四年十一月一日のロシア社会民主労働党の決議と原則的に一致していることを満足をもって認めた。と同時に、ツィンメルワルド多数派の不徹底な点、とくに彼らが意識的に避けた第二インターナショナルの崩壊の原因、および全ヨーロッパに瀰漫しているオポチュニズムの経済的根元の発見を怠った点などを暴露した。レーニンはつぎのようにのべている。[8]

「採択された宣言文は、事実、機会主義と社会排外主義とのイデオロギー的・実際的な分裂にむかっての一歩前進を意味していた。しかしながら同時にこの宣言は、その分析が明らかにしているように、不徹底と中途半端という短所をもっている。」

その機会主義的イデオロギーについて、彼はつぎのようにきびしい批判を試みている。

「人々は、何がそこからおこったかを知っている。俗うけのする

説明のために、人は、広汎な大衆にむかって、この戦争における祖国防衛の思想は、資本家の虚言であるという。しかしヨーロッパの大衆は、結局無学文盲ではないのだ。それゆえこの宣言のほとんどすべての読者は、幾百の社会主義新聞、雑誌などから、正しくこの虚言をきいたし、また現実にきいている。彼らは、プレハーノフ、ハインドマン、カウツキーなどのあとについて、たえずこの虚言をくり返しているのだ……。」

レーニンは、ツィンメルワルド多数派の不徹底な点を追究すると同時に、ツィンメルワルド左派にたいしては、第三インターナショナルの結成をよびかけたのである。

第一次大戦中におけるこの社会主義者たちの組織はつづき、一九一六年四月二四日から二五日までのキンタールにおける国際社会主義者会議および一九一七年九月五日から十二日まで開かれたストックホルム会議となって発展せしめられた。従ってツィンメルワルド会議の結果は大きな影響をあたえ、とくにドイツ支配階級にたいして恐怖をあたえ、カイゼルの警察と軍隊は、ツィンメルワルド派の人々がもたらした情報を集め、指導者をとらえようと必死になった。(9)

「最近、その体裁も内容も、煽動的なそして部分的には非良心的にも民心をあおりたてるような仕方で、国民のなかにあるいは軍隊の内部に一方的な党派政策をもちこもうとする意識的な意図をあらわしているところのパンフレットや印刷物が流布している。

こういうものによって、わが国民的な闘争のために絶対必要な統一が危くされ、わが抵抗力も弱められるので、このような運動には、あらゆる方法をもって敵対しなければならない……。

たとえばつぎのようなものがある。パンフレット、『主要な敵は自国内にいる』、ライプツィヒ、ウィルヘルム・マイア書房。著者名なしのパンフレット（八頁）『多数派はいう……少数派はいう……』」

とくにこのリープクネヒトの「主要な敵は自国内にいる」という主張、「城内平和ではなく内戦」（Burgkrieg, nicht Burgfriede!）というスローガンは、レーニンのプロレタリア国際主義の主張とも合致し、一九一六年一月一日に採択された綱領の上に立っていた。ローザ・ルクセンブルクによって起草され、一九一六年一月一日の左派の会合で採択された綱領は、「エルフルト綱領を国際社会主義の現代的な問題に適用する」という基本的態度を冒頭に、十二ヵ条からなる左派の立ち向うべき歴史的課題、そのあとにこれを遂行するにあたっての六ヵ条の原則がかかげられている。前者の第五条にはつぎのように帝国主義戦争の本質が暴露されており、(10) またリープクネヒトの精神でもあった。

「世界戦争は、国家の擁護にも、あるいはいずれの国の国民大衆の経済的政治的利益に役立つものではなく、それはたんに、世界支配と資本によって未だ支配されていない地域をめぐる異なった国々の資本家階級の間における帝国主義的な競争の所産である……。国民的な利益とは、労働者大衆をして、その不倶戴天の敵、帝国主義に奉仕せしめようとする偽りの手段として役立っているにすぎない」。

そして反戦反帝国主義運動を広く一般大衆のものにするために努力した革命的左派の活動は、一九一五年五月二八日、ウィルヘルム・ピーク（Wilhelm Pieck）の指導のもとに、約一五〇〇人の婦人が反政府デモを行うという成果をもたらした。(11)

「すでに知られているように、三月十八日に、国会議事堂の前で、平和を要求し重税に反対する婦人たちによる自然発生的な示威運動がおこなわれた。その当時は約五〇〇人が参加したにすぎなかった……ところが、五月十八日には少なくとも一、五〇〇人——その多くは婦人であるが——が国会の前に集まり、大きな声で平和を要求し、税金に反対し、デモンストレーションを行った。すでに三月十八日の場合でもそうだったが、デモにかんする事は何事でも報道してはならないという検閲局の禁止命令が新聞に加えられた……」。

戦争による国民生活の窮乏化、被害の増大、肉親の死などによる沈滞、こうした大衆の不満は、さらにプロレタリア国際主義と結びつくことによって、戦争をおしすすめようとする支配階級に重大な脅威をあたえる結果となったが、戦争にたいする協力者でもあったS・P・D・中央派もかなりの衝撃をうけざるをえなかった。元来カウツキーおよびハーゼらを中心とする中央派は、政府の帝国主義政策には反対しながらも、左派のように徹底的な反戦・反帝国主義の立場を明らかにすることができず、むしろ「城内平和」の美名のもとに右翼ショーヴィニストと妥協し、結果としては日和見主義に移行するという誤謬を犯したのであった。レーニンがこのような中央派の態度にたいして徹底的な非難を加えたことはよく知られている。しかし一九一七年ボルシェヴィキ革命の勃発以前のこの時期においては、ローザやリープクネヒトは、この中央派の本質を見抜くことはできなかったし、また中央派を支えていた階層的な基盤についても充分な認識に達することができず、従って、革命的左派は、右派ショーヴィニストから中央派をきり離してこれを孤立に追いこむことができると信じていた。この結果が、一九一五年のはじめに、カール・リープクネヒト、フランツ・メーリンク、ヘルマン・ドゥンカー、ユリアン・マルクレウスキー等を中心に党執行部および国会議員団にたいして発せられた抗議書（Protestschreiben）であり、約一千名の同志が署名したといわれる。この抗議は、広く大衆的な基盤の上に、党執行部の反対派の結集を導き出そうとする努力にほかならなかった。この抗議文の冒頭にはつぎのように書かれている。(12)

「同志諸君！

最近の数週間の事件は、われわれをして以下のことを書かしめるに至りました。一九一四年八月四日をもって、ドイツ社会民主党の議会的もしくは議会外の指導は、比類のない歴史的瞬間にお

いて、その党の公約の無視を意味するだけでなく、従来までの基本的な原則からの完全な背馳を意味したところの政策をとりはじめました……」。

このようにのべて、党が過去一年来とってきた政策がいかに誤まっており、勤労大衆の利益およびその権利をふみにじるものであるかを縷々としてのべ、党がすみやかに一九一四年八月四日以前の状態に復帰することを要求している。この抗議書にたいする直接の回答は、党執行部ではなくて、ベルンシュタイン、ハーゼおよびカウツキーらから、一九一五年六月十九日のよびかけ（„Das Gebot der Stunde“）が発せられた。

すなわちこれによれば、カウツキー、ベルンシュタインおよびハーゼらは、党内の排外主義者や合併論者の有害な政策の仮面をはぐことなしに、〝自由な協定の基礎に立って〟平和にたいする決定的な意思を表明することに限定したというのであって、これはいわゆる党内平和（Frieden innerhalb der Partei）以外の何物でもない。このようにして、カウツキーらの中央派はジューデクムらの帝国主義者と妥協したのである。[13]

左派にたいする右派ならびに中央派のこの衝撃は、大衆の中央派の党首脳部への不満となってあらわれた。すなわち、一九一五年十月二九日、党委員会におけるS・P・D・婦人代議員の発言に明らかであって、[14] これによれば党委員会のベルリン代表は、党員の要求に副って動かないというのであって、党指導部は、国民の間に昂まる不満、重税による生活の困窮、生活物資の急騰にともなう窮乏化を無視していることを非難し、彼らが政府およびブルジョアジーの併合政策にたいし公然と闘い、生活条件の悪化に反対し、平和のためにたたかってこそはじめて党は、一九一四年八月四日以前の状態にもどることができることを力説した。これにたいして、中央派の指導者は、社会改良主義者として政府の密接な協力者であることにかわりがなかった。総理大臣ベートマン・ホルヴェークは、一九一五年の閣僚会議において、「戦争の継続の間、今までに、いかなるところにおいても、何物も約束した覚えはない」と豪語した。[15]

右翼社会民主主義者の政府との協力、帝国主義戦争と徹底的に闘おうとしない彼らの態度にたいし、リープクネヒトは、議会の演壇から大衆の抗議に訴えようとし、政府にたいし鋭い質問を展開したが、S・P・D・の議員は政府を味方としてリープクネヒトを極力阻止しようとした。一九一六年一月十二日の社会民主党国会議員団の議会報告によれば、[16]

「ソスケの演説のあと、演説の時間は十分間短縮された……。バウァはリープクネヒトの行動を粗野な暴力行為であり、議会にたいする名誉毀損であるとみなした。彼はつぎのように要求した。すなわち、S・P・D・議員団にたいし、議事運営の変更を動議として提出し、従って質問は議員幹部を通じてのみ提出されるべきであるというのであった。そこでリープクネヒトの行動は妨害をうけることとなったのである。

またレーデブールは、つぎのような意見をのべた。リープクネヒトの戦術は、誤っているし、また質問の開始にあたって、党が明らかにした考え方と矛盾する……」というのである。

リープクネヒトは、個人的な攻撃はさしおいて、つぎのような発言をした。すなわち、

「わたくしの闘争は、予算の承認だけにかんするものでなく、予算の承認に至って頂点に達したところのその全政策、その政府支持の政策、階級の調和、議会的もしくは議会外部での城内平和にかんするものである。戦争予算の承認は、党の基本的な原則の完全な否認を意味するのみならず、一年半にわたってあなた方が追随したところの政策なのだ。もしも国会議員団が、予算の承認という点で、あらゆるきびしさをもって、そして公然と反対することが義務であるならば、その全政策を、まったく顧慮するところなく、公然と妨害することもまた少なからず義務ではなかろうか。一九一五年十二月二〇日から二一日にかけての規則破壊の戦術は、もしそれらが、一九一四年八月四日の政策に反対して、完全にやりとげられないとするならば、全く無意味なものとなる……。」

さらにまた一九一六年一月十三日、S・P・D・議員会議の席上、中央派のフリードリッヒ・ガイアーは、リープクネヒトに反対し、彼の発言は議会の権限を危くするものであると非難した。このように中央派は、議会の尊厳という美名のもとに、リープクネヒトの活動を非難し無視しつづけることによって、ついに彼をS・P・D・から除名するに至った。そしてついに四月八日には議会における発言が停止されたのである。つぎにかかげるのは、一九一六年四月九日の、「カール・リープクネヒトの議会活動の抑圧措置にかんする首相ベートマン・ホルウェークの秘密内閣顧問にあてた電話」[17]である。

「昨日の議会におけるリープクネヒトの事件は、昂奮をまきおこしました。なぜなら下院はまだそのような事件を経験したことがなかったからです。公平な(?…筆者)議員フーブリッヒ（Alfred Hübrich）は、演壇にかけよりました。そしてリープクネヒトにせまり、彼の演説草稿とその他の新聞をとりあげて、それらを床にたたきつけました。リープクネヒトがなおも演説をつづけようとすると、彼とミュラー＝マイヌング（Müller-Meinung）との間に、危く力づくの喧嘩がおこなわれようとしたが、最後の瞬間に暴力行為だけはようやくさけられた。私は議長に、このような事件がくりかえされることによって、それとともにおこる惧れのある大きな危険について、真剣に説明しておいた。彼は、議会の会期延長の前に、リープクネヒトはもはや発言を許されないようにするために、無条件で骨を折ることを約束しました……」。

これによってみても、読者はS・P・D・中央派が、本来、帝国主義を前にして同志であるべきリープクネヒトにたいして悪意と陰謀をこらしていたかをよみとることができるであろう。そして窮地においつめられたリープクネヒトは、一九一六年五月一日、叛逆罪

月二一日、リープクネヒトおよびオット・リューレ（Otto Rühle）とともに戦争予算に反対していたが、S・P・D・の政策全体が破綻を来すに至ったのは、一九一七年、ロシア二月革命の影響がドイツにも波及し、S・P・D・から別れて、いわゆる独立社会民主党が結成された頃からであった。

（1）Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Band I. Juli 1914–Oktober 1917. Dok. 54 (S. 121) Von Clara Zetkin verfasster offizieller Bericht über die Verhandlungen der Internationalen Sozialistischen Frauen-Konferenz in Bern vom 26. bis 28. März.

（2）Dokument 55; (SS. 125—126.) Manifest der Internationalen Frauenkonferenz in Bern vom 26. bis 28. März 1915.

（3）Dokument 59; (S. 152) Offizieller Bericht über die Verhandlungen der Internationalen Sozialistischen Jugendkonferenz in Bern vom 5. bis 7. April 1915.

（4）Dokument 78; (S. 215) Offizieller Bericht über die Verhandlungen der Internationalen Sozialistischen Konferenz in Zimmerwald vom 5. bis 8. September 1915.

（5）Dokument 79; (S. 226) Manifest der Internationalen Sozialistischen Konferenz in Zimmerwald vom 5. bis 8. September 1915.

（6）Dokument 80; (SS. 230—231). Manifestentwurf der linken Delegiertengruppe auf der Internationalen Sozialistischen Konferenz in Zimmerwald vom 5. bis 8. September 1915.

（7）Dokument 62; (SS. 165—166) Von Karl Liebknecht verfasster Aufruf der Gruppe Internationale vom Mai 1915 zum Kampf gegen den deutschen Militarismus und Imperialismus.

（8）Dokument 82; (S. 236) Artikel W. I. Lenins über die Ergebnisse der Internaticnalen Sozialistischen Konferenz in Zimmerwald vom 5. bis 8. September 1915.

（9）Dokument 68; (S. 190) Rundschreiben des preussischen Kriegsministeriums vom 26. Juni 1915 an die oberen Militär behörden über die Verbreitung vom Flugblättern und Druckschriften.

（10）Dokument 95; (S. 280) Von Rosa Ruxemburg entworfene und auf der Reichskonferenz der Linken vom 1. Januar 1916 angenommene Leitsätze.

（11）Dokument 63; (S. 167) Bericht der Gruppe Internationale über die Frauendemonstration für den Frieden am 28. Mai 1915 vor dem Reichstagsgebäude.

（12）Dokument 64; (S.169) Protestschreiben oppositioneller Sozialdemokraten vom 9. Juni 1915 an den Vorstand der SPD und den Vorstand der sozialdemokratischen Reichstagsfraktion gegen die Burgfriedenspolitik.

（13）レーニン「第二インターナショナルの崩壊」大月版「レーニン全集」第二十一巻所収。

（14）Dokument 85; (S. 246) In der Sitzung des sozialdemokratischen Parteiausschusses vom 29. Oktober 1915 vorgebrachter Protest einer Delegation Berliner Genossinnen gegen die Burgfriedenspolitik der Parteiinstanzen.

（15）Dokument 90; (S. 258) Aus dem Protopoll der Sitzung der preussischen Staatsministeriums vom 11. Dezember 1915 über eine Änderung des Reichsvereinsgesetzes als Konzession an den rechten Flügen der Sozialdemokratie.

（16）Dokument 100; (S. 294) Bericht über die Sitzung der sozialdemokratischen Reichstagsfraktion vom 12. Januar 1916, in der Ausschluss Karl Liebknechts aus der Fraktion beschlossen wurde.

（17）Dokument 124; (S. 124) Telegramm des Reichskanz-

の容疑で拘禁されるに至った。この事件は、のちに、ドイツ共産党創立の際の、官憲によるローザおよびリープクネヒトの虐殺につながるものであったという点で忘れてはならない。一九一六年五月二日、ベルリンの警視総監はカール・リープクネヒトの訊問について、内務大臣につぎのように報告している。(18)

「国会議員、カール・リープクネヒト博士の逮捕にかんする小官の本日の報告についての補足として、当人にかんする訊問記録の別紙写しを、手交致しました。その内容をみますと、リープクネヒトは、メーデーと五月一日に行われる反戦のデモンストレーションをよびかけるビラをまいたことを自白致しました。そしてさらに意図的に、五月一日、ポッダム広場においておこなわれた平和のためのデモに参加し、その際、群衆に、何度も、『戦争をやめよ』『政府を打倒せよ』とよびかけたことを認めました。また彼は、世界大戦をできるだけ早く終らせるために、敵国の同志とともに活動したことをも明らかに致しました。従ってリープクネヒトは、叛逆罪に該当致します……」。

リープクネヒトとローザを指導者とする左翼社会民主主義者の勇敢な闘いと、大衆の抗議にもかかわらず、戦争は強行につづけられた。S・P・D・は前後五回にわたって新しい戦争予算の協賛をせまられ、その度にこれに同調せざるをえなかった。すでに戦争が思わしくない経過をたどったとき、従来の政策によって民心を失うことをおそれたS・P・D・中央派の議員十八名は、一九一五年十二

lers, von Bethmann Hollweg, vom 9. April 1916 an den Geheimen Kabinettsrat des Kaisers über Massnahmen zur Unterdrüchung des parlamentarischen Tatigkeit K. Liebknechts.

(18) Dokument 133; (S. 379), Schreiben des Berliner Polizeipräsidenten vom 2. Mai 1916 an den preussischen Minister des Innern über die Vernehmung Karl Liebknechts.

――一九六一・八・一四――

独占度測定の問題 Ⅱ

原　豊

＊

前稿において試みた理論的分析から導き出された独占度指標の検討にひきつづき、本稿では、独占度測定の一手段としてのいわゆる集中度測定をめぐる問題をとりあげよう。

一、一般的集中度と市場集中度

集中度をもって独占度と直接に関連せしめることは、どちらかといえば固定観念に近いものとなっているようである。集中度とは、一般に、少数の企業の手に、生産や雇用や資産等が集中する比率を示すものである。それ故、独占度をもって、企業が市場支配力を獲得する程度を示すものと考えるときには、常識的な判断からこの両者が連結され、独占度が集中度の増大函数であるといった飛躍した推論が下され勝ちとなる。フェルナーがいうごとく、「いわゆる独占の尺度は、本質的に、集中の尺度とは異なっている。」[1] しかし、両者の関連は決して稀薄ではない。言葉そのものの意味での独占状態では、集中度はもとより極値一〇〇％をとる。また、全国市場に臨む大企業は、当該市場の集中度が高くなければ、潜在的競争企業を圧迫したり、いわゆる寡占的競争を行なったりすることは不可能である。さらに、低い集中度の市場では、協定のような競争制限的手段は実施し難い。大規模の経済が存在する市場では、企業規模は大となり、集中度も高くなることが予想される。このように、ざっと考えてみると、集中度は、独占度の少なくとも一つの指標と考えうる根拠がある。

一九三〇年代、独占が経済理論の領域で脚光をあび、現実の経済においても世人の注目の的となった時代以降、現在にいたるまで、この集中度測定の試みが、数多くの人々によってくり返し着手されていることもまた、それがただ単なる統計的なすさびでなく、圧倒的に存在する寡占状態の分析に際してまず必要な分析用具であることを如実に示している。